



『石器で鉄器を作る』

弥生時代が始まった時期、稲作と共に鉄の斧（おの）や鉄の鍬（くわ）が持ち込まれました。斧の柄や農具の加工は便利な鉄の刃物に変わってゆきます。しかし、この刃物は使い続けると、刃先が傷んできます。刃先は砥石で研ぎ直し、再生します。鑄造や鍛造の鉄器が欠けたりすると残った部分を加熱し、鍛え直して再利用しました。

ところで、鉄の刃先や再生に使った道具は何だったのでしょうか？もちろん石です。石の台、石のハンマーで鍛造したのです。熊本県の二子塚遺跡から、鍛冶屋の道具と思われる数種類の石が出土しました。砥石・石の台（鉄床＝かなとこ）・石槌（ハンマー）です。表面に鉄の錆びが食い込んだり、刃先が深くささっています。同時に三角形のさまざまな鉄片や鉤状の鉄片も出土しています。石の鍛冶具は東南アジアなどの一部地域で、現在でも使われているようです。

『倭人と鉄の考古学』の本では、これらの石器を使って、弥生の鍛冶屋仕事の再現実験を行い、鍬（やじり）・刀子（とうす）・袋状斧・板状斧・やりがんなを作りました。

鍛冶師は松山在住の白鷹幸伯（しらたかゆきのり）氏、製作後に以下のような感想を述べています。

- a. 柄を付けず、直接手に持つタイプの大型石鍬は鉄塊の粗延ばしに有効で使い勝手もよい。
- b. したがって柄付きの小型石鍬とは工程を違えて使用されたであろう。
- c. 小型鉄器の製作に関しては鑿切りが大変有効である。
- d. ピンセット形の鉄鉗は使い勝手が悪い。

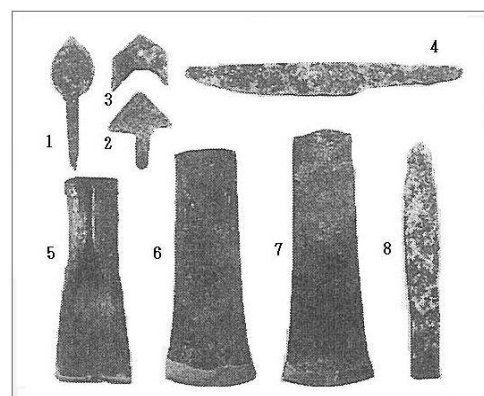
著者は、予定していた鉄製品を作り上げることができた。弥生の鍛冶具による鉄器製作は実際に可能であった。その作業風景に接すると決して**弥生時代の鍛冶工人が片手間に作業を行っていたのではなく、熟練した技術をもっていたことがわかる。道具が原始的にみえる分だけ、技術は高かったに違いない。**と記しています。

弥生時代の鍛冶具



鑿（のみ、⑧～⑩）は鉄製ですが、それ以外は石が多用された。鉄床（かなとこ、①②）石槌（いしづち、③～⑥）

実験で製作した鉄製品



1～3 鍬（やじり） 4 刀子 5 袋状斧
6・7 板状斧 8 鉗（やりがんな）

鍛造：金属材料を加熱し高温でハンマー・プレスなどで打ち延ばし、必要な形状と韌性（じんせい）を与える。Forgeing
鑄造：溶解した金属を鑄型に注ぎ込んで冷却し、所定の形状の鑄物とする金属加工法。Casting

参考資料

倭人と鉄の考古学 村上恭通 青木書店 1999年

ホームページと電子メールをご利用ください。

URL <http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>
<http://www.kanamonoya.co.jp/ryou@memenet.or.jp>

むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください！！